日本人とロシア人の「母校」
今も残る紗那国民学校（択捉島）

1938年（昭和13年）落成当時の紗那国民学校
当時は紗那尋常高等小学校
（公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟提供）

壁に大きなポスターが張られている建物は
スポーツセンターとして使われていた
（2016年9月撮影）

択捉島紗那にある消防署や図書館が入っていた建物が日本時代「紗那国民学校」だと分かったのは二〇一三年のこと。修復工事をしていた島の建設会社が、屋根裏から布製の赤い袋を見つけ、その中から、一九四〇年頃の日本語の新聞やポスターとともに、児童が描いた絵画や習字が出て来たことがきっかけだった。

紗那国民学校は一九三八年（昭和十三年）に建設され、当時は紗那尋常高等小学校だった。ソ連占領後は日本人が島を追われるまで、日本人の子供とロシア人の子供が午前、午後に分かれて同じ校舎で勉強した。その後、消防署や図書館、スポーツセンターとして使われてきたが、いずれの施設も新築移転となり、現在は空き家状態。島に残る数少ない日本建築が今後どうなるのか心配されている。

図書館が移転したあとの紗那国民学校内部
（2016年5月撮影）

一〇一六年五月のビザなし交流で、択捉島の新しい図書館を視察した際、職員に確認したところ「日本時代に学校だったことはもちろん知っています。私たちにとっても子どもの頃に通った学校です。図書館が移転した後については、自動車学校が入る計画があり、建物は維持されると思います」と話していた。

今も残る紗那国民学校
（2016年9月撮影）

経文に隠された学籍簿

～択捉島出身の青田 稔さん～

青田稔さんは択捉島紗那で生まれました。お父さんの青田武貴さんは、紗那国民学校の校長先生をされていました。写真の経文は生家がお寺だったお父さんが持っていたものでした。この経文の行間には二百五十名以上の人名や生年月日などが書き込まれています。

経文の文字の間に生徒さんの情報が丁寧に記載されています

書き込みのはじめには「昭和二十年八月十五日終戦ト同時ニ現地部隊長ノ指導命令ニヨリ一切ノ書類焼却ニツキ推定申告ニヨリ卒業台帳編纂シ茲ニ転記ス」とあり、校長先生だったお父さんが、卒業台帳や学籍簿として生徒の名前や卒業年月日などを書き写し、引き揚げ時に大切に持ち出したものです。

ご両親は択捉島にいた頃の話しは一切しなかったといいます。今となっては、経文に学籍簿を転記したお父さんの思いは想像するしかありませんが、お寺が生家である父さんが経文を持ち歩いても疑われることがなかったことや、文字の多い経文の中に転記しても紛れることから経文に転記したのだろうと青田さんは推測しています。